

未開種族の神話 (承前)

——機能主義の方法——

堀 喜 望

- 一、序説——神話的と未開的　二、人類學的比較神話學——タイラーの方法　三、機能主義的神話學——マリノウスキー(以上前號)　四、未開種族の神話——その機能的關聯　五、機能主義の基礎——未開種族研究の方法　六、結語——人類學の問題

四

上述によつて明かにされた如く、神話は單に物語の本文のみならず、それが語られる狀況と、それに結合した社會的・道德的な行爲の保證によつて文化的な脈絡を形成し、従つてその機能に於て單なる傳承的な物語や歴史的事實の敘述から區別されたものである。

マリノウスキーが親しく實地調査によつて精密な報告を與へてゐるトロブリアンダ諸島に於ては、かかる物語は土着民たちにより、その機能的性格に従つて夫々獨自の名稱を與へられ、明瞭に區別されてゐる。そこでは物語を意味する言葉として *Kukwanebu*, *Libogwo* (*Libwogwo*), *Lijin* (*Lijin*) の三種があるが、それらはその話し

方、身振り、語られる様式から、その時期、背景の状況、物語の所有者の社会的關聯、話し手の關心態度と聽衆のそれに應ずる相互的複合的な關係などによつて、社會の文化的全體性に於て各自異つた意味を有してゐる。

第一の *Kukwanobu* と云はれるものは、民間傳承の類で、謂はば御伽噺とも云ふべきものである。トロブリ

アンド地方では十一月の候に入れば雨期になるが、田園の收穫は既に倉庫に充ち、彼等の儀禮的交易的遠征たる *Kula* の部族的行事には未だ間のある頃、閉ぢ込められた夜、部落の若人たちは爐邊を圍んで古老の口を通して語られる物語に耳を傾ける。それには出來事の眞實性に關する信仰もなく、主として輕い氣持で聞き傳へられる部落の娛樂のための物語である。それは部落の或る成員によつて所有され、その部族に屬するものであり、熟練した所有者たる古老の演出するところである。彼の獨特な話術と身振とは人々のまどゐの中に笑と好奇心を涌き立たせる。物語の進行の過程には聽衆によつて小唄が合唱され、それには次期の採培と收穫の豐饒を寓する意味が讀み込まれる。これらの物語はその内容と話し方に於て爐邊の團樂を主とする純粹に娛樂的なものであるが、それと同時に合唱される小唄の呪術的な意味を通して、「彼等の話が最近菜園に植えた新しい作物に有利な影響がある、といふ漠然とした信仰が、餘り眞面目に取られるのではないが存在してゐる。」²⁾ かくの如く *Kukwanobu* のじとひは樂みを中心として、同時に輕い呪術的な信仰も加味されてゐるのである。従つて「勿論その本文は極めて重要ではあるが、その脈絡なしには生命のなきものに止まる。われわれが既に見た如く、物語の興味はそれが語られる仕方により著しく高められ、適當な性格を與へられるのである。」³⁾

これに反して第二の *Iibogwo* は單なる興味的な架空の物語ではなく、歴史的な事實を内容とし、眞實性を以

つて受け取られる歴史的傳説であり、その物語が眞實と信ぜられるために Kukwamebu よりも價值の高い重要なものと見做される。しかしそれについては物語られる特別な様式とでもなく、何時と定まつた季節もないが、Kula 遠征の航海などの途上、祖先の英雄的行爲の想ひ出の宿る記念物——海中の風景から異國の風土・住民たちに關聯して長上から物語られ、部族或ひは家族の名譽を聞き手の子孫たちに傳へて顯揚すると同時に、若者の怜持と功名心とを培ひ、或ひはまた話し手自身の過去の記憶——戦争・遠征に於ける功名、交易の經濟的成功を誇示し、自己の名譽と身分とを保證するに役立つものである。Libogwo と呼ばれるものの中には、話者が目撃したか、或ひは少くとも生きた記憶をもつた者によつて保證された「歴史的な説話」の他に、直接的な證據の連續は斷たれてゐるが部族が通常經驗する範圍の事物に關する「傳承」や、現在の文化の領域の外にある遠隔の地または過去の時代についての「傳聞の物語」が含まれるが、これらの傳承の確實性に關しては區別されず、凡てその眞實性の信仰に基いて共に Libogwo と名づけられてゐる。それは何れも記憶の傳承を媒介として、主體に於ける眞實性の信仰によつて統一され、過去と遠隔との距離を自己に内面化した事實の眞實性の物語であり、かかる傳統の名譽の保存と自己の功名の將來的な獲得の野心とによつて、その物語の統一された現實的機能を擔ふものである。即ちそれは過去の事實に關はると共に、記憶の主體的なはたらきに於て部族の現在の現實性と結びついた事實の傳承である。

第三に前者と同様に眞實ではあるが單なる事實の説話に止まらず、神聖なる物語として部族によつて畏敬され獨自の態度を以つて對處される物語の體系がある。それは彼等によつて Libin と呼ばれるもので、前二者から區

別された「神聖なる物語」であつて、今われわれの問題としてゐる「神話」に相等するものである。けれどもそれが他の物語から區別される獨自の意味は、その本文の内容によるのではなく、實にその有する社會的な機能の脈絡を通してあらはにされるのである。それは祭祀的儀禮・呪術的處置・道德的技術的行動との相關の體系であり、これらを保證規定すると共に、それによつて實修神聖化される。これらの物語と結合した神聖の觀念、畏敬の情緒は、單にそれが物語られるときに經驗されるところのそれに内在したものに止まらず、その行為的表現としての風習・道德的規則と儀禮的處置に於ても同様に體驗されるのである。即ちそれは表現的現實に關する保證の根柢として、社會的な文化的關聯に媒介され、それを所有する部族とその歸屬する地域に於て、それが有するところの社會的機能によつて神聖の體系である。従つて Hiltl の意味の理解に關しては、特にこの文化的脈絡に於ける機能の把握が重要となるのである。マリノウスキーの「機能主義」がその獨自の機能を發揮するのは、實にこの領域であつたのである。

かくの如く神話は、その物語の内容の眞實性に止まらず、神聖なるものとして畏敬と崇拜を以つて對せられる超越的なものの體系であると共に、現在の現實性に於て儀禮的行動を通じて社會的な統制の力を保存する。それは「神聖と見做され、儀禮・道德及び社會組織の中に體現され、宗教及び呪術的集約的・效果的部分を構成する。」⁴⁾従つてその社會的な機能は「風習を定着せしめ、行動の様式を認定し、制度に威信と重要性とを附與する如き規範的な力」⁵⁾としてはたらくものである。神話はそれと關聯せる社會的な活動に對して單に後から與へられた説明や註釋ではなく、逆にそれを保證し、實踐的に統制する根柢として神聖なのである。それと同時に他方に於て祭祀・儀禮・風習及び社會的組織の現實性は、神話の中に直接的な表現を有し、超越的なものの現實性である。

即ち「文化的事實は、そこに於て神話が體現されるところの記念物であり、他方に於て神話は道德的規則・社會的集合・儀禮或ひは風習をもたらしたところの眞實の原因であると信じられてゐる。かくしてこれらの物語は文化の集中的な部分を形成する。」⁶⁾かかる社會的現實の統制的機能によつて、神話は現實の集中的な中心であると同時に、その社會的現實の根柢として超越的な世界であり、より高いより偉大な超自然的な現實性をあらはすものである。従つてそれはその現實性に關して社會的機能によつて現在と直接的に結びついた社會の集中的中心であると共に、超越的實在の秩序として現在からの直接的な斷絶性の世界を構成する。即ち神話はその機能的關係に於ては、かかる社會的現實性と超越性との相互性としての關係の全體性を形成するものである。

ところでかかる相互性としての神話の機能は、現實に於て直接にはたらく關係であり、現在の社會的關聯の内に内在すると共に、その根柢として直接的な超越性であり、現在から斷絶された世界である。それは自己否定を通じて相互否定的な媒介の統一ではなく、直接的な斷絶と交替との關係に過ぎない。即ちその超越性は現在との時間的媒介を斷絶した直接性の世界であり、その内實は「現在起り得ないものが起る」無媒介の存在として定立される。それは時間に媒介されることなき直接の超越性として、却つて自己の超越性を喪失する。それと同時に神話の機能は社會的現實性に於ける無自覺的な内在であり、行爲的自己の自己否定的な反省を通じて超越的な現實性との媒介に於て現在の構造をもつた時間的統一性ではなく、自己にかかる中心なき活動として、單に相對的な現在によつて時間性なき現在の機能的平面に自己を解消する。従つてかかる時間の媒介なき單なる現在と超越との相互性は、無媒介の相互的移行の關係であり、交替的な轉換の過程に過ぎないであらう。その超越性の規

定は、時間の現實に於て自己を否定し、かかる自己否定を通して行爲的現實を成立せしめる媒介の超越性ではなく、直接的な斷絶として、逆に自己自身を時間の相對性に内在化する關係である。それと同時に直接的な現實の活動は超越的な規定に於て自己の偶然性を否定し、自己自身の行爲的中心に於て超越的構造に媒介された統一性として、時間的現在の構造を限定するものではなく、かかる時間の統一性なき活動として超越性との否定的媒介を解消した直接的な合一の關係である。かくの如く機能的關係に於ける超越性と現實性とは、自己否定的な媒介の統一なき相互性として、自己の時間的構造を自覺することなき「關係」に過ぎないであらう。

しかしながら神話の現實性は土着民たちの意識にとつて、何等かの意味で太古の先歴史的時代に配當されたものであり、時間の關聯に於て媒介された構造である。彼等が神話と現實との區別に於て、前者を太古の時代に、歴史的出來事を比較的最近の時代に屬するものとして理解することは、マリノウスキ自身認めるところである。従つて神話は、彼等に於て超自然的なものとして、時間を超えた世界であると共に、しかも時間的な關聯によつて媒介されたといふ意味を含んでゐる。その意味に於て「現在起り得ないこと」は何等か過去にあつて「既に」生起した事柄でなければならぬ。けれどもこの時間の過去に關する土着民の意識は、極めて制限されだ内容をもつてゐるに過ぎない。彼等の述べる歴史的出來事としての過去は、自己の社會に生起した比較的新しいものに限り、それが現存する人々や環境と直接に關聯することができ、彼等の記憶に結びついた事柄を含むものである。彼等の歴史的意識に關しては、過去は自己或ひは父祖の記憶の内に起つたか否かによつて認められ、その境界線を超えると一切の過去の出來事は同一平面におかれ、そこには時間的遠近の程度の差のない空間的な並存

の體系が展開されるに過ぎない。従つて彼等に於ける時間的過去は主觀的意識の記憶の過去であり、かかる主觀性を否定して客觀性に媒介された時代の遠近法を缺くものである。

トロブリアノドに於て歴史的な過去は、Lithgow の傳承に於て保存される出來事であることは、既にわれわれの見たところである。しかしそれは時代的に云つて比較的新しい出來事であり、その眞實性は自己の體驗の中心に於て記憶に保存された内容、或ひは他者の記憶に關して自己との關聯に於て關心的な顯著な出來事、即ち父祖の現實的な體驗が世代の交替に於て傳承的に眞實性を以つて傳へられた限りの謂はば世代的な過去であつた。従つてそれは記憶の連續によつて直接に現在の意識内容に保存された主觀的な内容に過ぎず、自己自身を客觀性の事實に媒介する自己の行爲の中心を自覺せぬものとして、主觀的意識の内面に於ける記憶の遠近的關係である。それ故に行爲的現在に於て意識の連續性を否定し、現在の過去を將來的な自由企劃に於て自己に對するものとして方向を逆轉して、過去・現在・未來の時間的構造の統一に展開する如き歴史の時代の自覺的な遠近的關係ではない。それは連續的に世代の循環に於て圓環的に運動する内在的な事實であり、従つてかかる循環的運動を行爲の現在に於て斷ち切つて、自己に於て行爲する自由なる活動によつて對自的に時間の系列に媒介された關係ではない。「これらの土人たちは過去を考へるのに、時間の繼起的段階に於て展開される永い持續を認めない。」⁷⁾従つてかかる主觀的記憶の内面的な循環の直接性を超えれば、過去は自己の意識の連續性を超へた外面性として時間的持續の地平を超えて、時間なき空間性の中に解消し、自己に對する外面的存在として、歴史的持續の遠近法を缺如した事物の並存的な排列となり、自己の時間的統一の中心との媒介を放棄した外面的な空間的存在に委ね

られる。「彼等の精神には時間に於ける時代の觀念が全く存在しない。過去とは出來事の老大な倉庫である。従つて神話と歴史との間の境界線は、決して明確な時期の區劃と合致しないのである。」⁸⁾ 即ち未開種族に於ては、過去が體驗の主觀的内面性として、自己に對する客觀性の媒介なき直接性であり、その故にまたそれは自己に對して主體的に媒介され、行爲的自己のはたきに統一される構造を放棄して、單なる自己の外面性とし時間的自己から疎外されるに到るのである。

以上の如く神話的世界は既に現在起り得ないものとして太古的な時間の過去に屬するものと考へられると共に、他方それは時間的構造に關して、現在の現實との媒介を通じて時間的繼起によつて結びつく過去ではなく、かかる時間の遠近法的構造を缺如した外面性として「出來事の老大な倉庫」であり、空間的な排列に於て自己を疎外した存在の構造であつた。従つてそれは、かかる自己に對する空間的統一性として、現在の時間的媒介の連續性を斷絶された直接的に存在する超越性である。それは現在に於ては起り得ないものが起る他の世界であり、われわれに對しては神聖なる超越性として存在する。かくの如くに神話的世界は現在からの自覺的な時間的連續性を斷絶するものとして直接的な超越性であり、その空間的構造によつて社會的な關係であるが、かかる自己自身の直接的な空間的構造に關して、現實との否定的媒介によつて自己の自覺的中心をもつことなき空虚な存在に過ぎず、従つてその構造的關聯の内實に於て現實の直接的反映である。かかる空虚な超越性として、それは現在との直接的に連續された構造であり、現實的世界の中に無媒介に内在する。土人たちに於ける時間の歴史的遠近的關係の缺如は同時に歴史的現實に於ける「進化」の觀念の否定であり、現實的世界の直接的な同一性である。現在の事物は過去の變化發展によつて成立したのではなく、それと同一のものであり、また過去の現實は現在

に對するものとして現在に媒介され起源によつて現在の變化に結びつけられるものでなく、現在のものの存在に過ぎない。従つて現在との時間的連續性の否定された神話的過去の超越性は、その内實に於ては單なる現在の寫しに過ぎず、現實的社會と直接に同一的な社會構造をあらはすものである。「トロブリアンドの傳承に於ける神話的人物は、現在の土人たちと同一の社會的及び文化的條件の下で、同一の型の生活をしてゐる。」¹⁾ 彼等は現在有すると同一の部族的・民族的組織を形成し、同一の禁忌に服し、その社會的生活的關聯に於て現在の現實性と全面的に照應する世界に生きてゐる。かくして神話的出來事の超越性は、現在に於ける社會的現實への直接的な内在性であり、かゝる内在性によつて現實の社會的關聯に於ける機能的中心となることができるのである。

例へば原始創造の神話に於てトロブリアンドの住民が語るところによれば、地上に現はれた人間の最初の組たる姉弟が部落の神聖な洞窟から出現し、その土地を自己のトーテム氏族の所有とし、現在部族の凡ゆる文化をこの地上に携へて來たことが物語られるが、人間はそれまで地下の生活に於て、現在地上の人間が生活してゐると同一の様式で生活し、トーテム的・社會組織的・呪術的・道德的な文化の一切に關して、彼等の地上出現と同時にその地下の生活のままを現存の部族に附與したと云はれる。これは部族の原始出現を傳へるものではあるが、決して人間と制度に關する始源・端初の説明ではない。土人たちはこの物語によつてかかる原初的な原因を説明しようと志すものでもなく、彼等にとつてそれは問題にもならない。人間は始めから現在のままで存続してゐたので、この物語に於てその發生に關する時間的な始源が説かれるのではない。それは現實の人間の集團と社會組織の機能が保證される神聖な根柢としてはたらくものである。即ち現存する社會的組織を正常化し、傳統の

價値的強化の機能をはたす根據として、現實の神聖なる條件である。勿論それが先行條件としては現在の根據であり、その限りに於て何等かの意味で現存の集團・組織を説明するといふのは確かであるが、それは決して因果的な原因の探求でも發生的條件の知的説明の要求に應ずるものでもなく、神聖な超自然的現實に立ち歸ることによつて、現實に傳統的價値と威信とを保證するものであり、現實的生活の秩序の超越的な神聖性の根柢である。従つてそれは、そこから現實が發生して來る時間的根據ではなく、却つて現在の現實的活動の中心として超越的な世界である。

かくの如く神話の世界はその内容に於ては現在の生活關係と全面的に照應し、現實の社會的關聯の機能的な中心としてはたらくものであつたが、それと同時に神聖な世界の秩序として超越的な根柢である。そこに於ては現在起り得ないことが起る斷絶された世界の秩序であつた。現實の世界は、かかる神聖性によつて機能的意味を保證され、自己の内にそれを内在すると同時に、自己自身に於てはかかる神聖性から斷絶され、神話的世界の出來事をそのままに再現することのできぬ有限性である。人間は最早不死ではなく、カスーは空を飛ぶことができな。人間はかかる神聖な超自然的な力を喪失し、それは現在では起り得ぬ超越的なものであり、非現實的ではあるけれども、Julia の出來事として超越的な眞實性をもつものである。Julia の世界に關して、「土人たちは彼等にとつて超自然的で異常な出來事に遭遇すれば、それを眞實でないとして否定するか、或ひはまたそれを Julia の領域に移すといふ傾向を有する如くである」¹⁰⁾と云はれてゐる。それによつてわれわれは、神話的世界の構造を理解することができるであらう。それは現實を超えた超自然性であるが、單に過去の不思議でも空虚な内容で

もなく、現實に於ける超自然的なるもの世界であり、現在の世俗的世界に於ては起り得ない神聖なる現實性を意味するものである。

以上の如く神話的世界は、その機能的構造に關しては、超越性と現實性との相互性として理解されるものであつた。神聖なる物語の内容は非現實的な眞實性として現實の世俗的世界を超越すると共に、かかる神聖性の根柢として現實の社會的關聯に於てはたらくものであり、それに於て自己のはたらきの寫しをもつ自己自身の現實性である。ところがかかる神話の内容が現實の日常生活の規範として、社會的道德的行爲に媒介される過程は、呪術的儀禮の實修を通じて可能となるのである。現在起り得ない出來事も呪術の媒介によつて現實に起り得る。超越的な世界は呪術に於て實修され、それを通して自己の神聖なる眞實性を保證する。神話の日常的現實性への相互性にかかる儀禮的行爲を通して媒介され、それによつて現在の人間の有限性は改變され、神聖なる力に參與すると同時に神話の超越性は現實に於てあかしされ、自己の現實的形式をもつのである。例へばカスー飛翔の神話に於て、それは *Ilith* の事柄に屬し、飛翔呪術の忘却によつてかかる能力から斷絶された土人たちにとつては起り得ないことではあるが、現在に行はれる呪術的相續により、その性質がカスーに分與されることができ、即ち飛翔する如き高度の速度が與へられる。呪術的傳承が完全な姿に於て記憶されたとすれば、その能力も亦可能であつたらう。即ち神話的世界と現實との斷絶はかかる呪術力の喪失によるものであり、呪術的通路を通して現實に於て實現され得る如き關係である。現在の呪術儀禮は、かかる神話的世界から傳承的相續によつて超自然的能力を附與せられ、現實に於ける超越的な力の再現にかかる神聖なる根柢に有するものである。ただ神話的人

物はその知識に於て完全な超自然的能力を有してをり、然るに「この知識は多くの場合既に喪失され、従つてこれらの不思議な事柄を行ふ力は完全に消滅してしまつたか、或ひは著しく減少するかの何れかである。」¹²⁾かくして呪術的能力はその保證を神話の世界の内に見出し、現實の世界を神聖性に結びつけると共に、それを通して神話の超越性が自己の眞實性を保證し、現實の機能的中心としてはたらくことができるのである。

- (1) Malinowski, B.: The Foundation of Faith and Moral, p. 12. cf. ditto: Myth in Primitive Psychology, p. p. 25. sqq.
- (2) ditto: Myth in Primitive Psychology, p. 25.
- (3) ibid. p. p. 29 sq.
- (4) ditto: The Foundation etc., p. 13.
- (5) ditto: Argonauts of the Western Pacific. An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea, 1922, p. 328.
- (6) ditto: Myth etc. p. 38.
- (7) ditto: Argonauts etc. p. 300.
- (8) ibid.
- (9) ibid. p. 301.
- (10) ibid. p. p. 302.
- (11) Cf. ibid. p. 328 sq.
- (12) ibid. p. 303.

五

以上マリノウスキーの機能主義の立場によれば、神話は超越性と現實性との相互性の形式を以つて把握された。それは未開種族の内實に於て、儀禮的處作・道德的行爲・社會的組織及び日常生活の脈絡に於てはたつき、未開種族の現實性の社會的基底であり、信仰の超越性と社會的行爲の現實性との相互的關聯として生きた全體を形成するものであつた。然るに機能の相互性はその關聯に於て自己の行爲的媒介による統一性としての構造的關聯ではなく、直接的な交替の關係としての循環であり、従つて自己に於て自己否定の時間性の契機を含むことなき空間的運動の過程に過ぎず、その直接性によつて生の形式である。それが未開種族の方法である所以である。元來「神話の主要なる機能は屢、呪術の組織に對する基礎として役立つことであり、従つて呪術が制度の支柱を形成するところでは何れも同様にまた神話がその根柢に見出され得るのである。」¹⁾マリノウスキーに於ては神話の機能は呪術的繼承のはたらく社會に於て生きてゐる關係である。従つてかかる生きた關聯に於て神話を把へんとした機能主義の立場が、呪術的な未開種族に於てその本來的地盤を見出したことは偶然ではない。マリノウスキーに於ける神話の機能的相互性はトロブリアンドの未開種族を通して理解されたものであり、その文化の一般的な機能的把握もそれを地盤としてをり、従つてそれは神話を生きてゐる未開社會の構造的關聯をあらはにするものであらう。ところがかかる未開社會の社會的關聯に於ける機能的相互性の形式は、文化の歴史的現實性を自覺した構造の關係ではなく、従つて文化の一般的形式としては自己に於ける時間性の契機を社會的關係の機能

に解消するものであらう。従つてこの場合に重要なる事柄は、かかる機能的關聯がわれわれにとつてはどこまでも未開種族に於ける構造であるといふ反省でなければならぬ。

さてマリノウスキーに於て、社會的現實の生きた關聯として把握されたところの神話的世界は、先づ何よりも相互性の限定として、生的段階の構造である。神話に於ける超越性と現實性の相互性は、既に見た如く神話的世界の超越が直接的に自己に對立するものであると同時に、かかる直接的な自己自身の限定によつて逆に現實性に於ける自己の中心として無媒介にはたらくところの同一性であり、現實の直接的な内在性であつた。即ち自己は他者に對する否定的な對立を自覺することなき被限定として、自己自身の限定の自律性を見失ひ、環境の自己限定の内に吸収され、自己は他者の内に没すると共に、それによつて他者の限定は自己自身の限定として自己の内に内在する關係である。かかる相互的な限定の轉換に於て、自己の主體的な否定的媒介なき圓環は、自己に對立する現實の機能化されぬ基體を残すことなく、一切を有機的な關聯の内に解消する。自己と環境とのかかる機能的關聯は、生命の有機的活動の形式に他ならない。従つて相互性の機能として把握された神話的世界は、生命的活動の全體性の構造に過ぎず、その中で歴史的自己の自覺が媒介されてゐない未開種族の現實の内に生きてゐる關聯である。

ところがかかる生の相互性は、限定と被限定との圓環的活動として、かかる限定の關係を自己に於て否定的に轉換する自己の自覺の中心を缺き、自己を統一の軸として對自的に時間的分裂の契機を通して媒介する現實性ではない。社會の現實性に於ては必然性の限定は自己に對する傳統の基體として自覺され、かかる對立性の自覺に

よつて、却つて自己の自由なる未來企劃に於て、自己自身をその中に否定する行爲的限定を通じて媒介される歴史的統一性であり、社會の空間的限定を行爲的現在の中心に結びつける構造的關聯でなければならぬ。従つてそれは一方に於ては自己に於て機能化することのできない社會的基體の自覺であると同時に、他方に於ては行爲的自己の中心的綜合を意味するものである。然るに生の直接性の立場にあつては、相互的限定のはたらきに於て、かかる自己の否定的行爲の中心を自覺せず、その時間的統一の構造を單なる空間の圓環的活動の内に解消する。従つてそれは歴史的自己の自覺的な統一的構造に關して、自己の時間性の契機を疎外した空間的運動の契機であり、自己を疎外したもとして自己に對立し、歴史的中心の統一に對する單に周邊的關聯の自己疎外的構造を示すものであらう。かくの如く自己に於ける歴史的基體を喪失し、主體の否定的限定の媒介を自覺することなき相互性の過程は、自己自身の存在に關しては自己の時間的中心に對するものであり、その構造の必然性の契機に從つて空間的な存在である。歴史的關聯に於けるかかる周邊としての存在は、時間の本來的中心から疎外されたものであり、その空間的必然性の規定として時間構造に於ける過去の契機である。そこに於ては自己の行爲的限定は、自覺的な自發性を喪失し、自己に對する必然的なものの限定としてはたつき、社會的傳統の直接的な限定である。行爲は未來的企劃性のないところでは、單なる過去の傳承的限定に過ぎず、自覺的自由の媒介なき必然性の過程として、空間的過去の相互性である。

かくの如く機能的相互性の關聯は、生の直接的活動として、時間的統一の自己否定的媒介を缺く空間性の關係であり、従つて歴史的現實の時間的空間的な立體的構造に於て、自己の中心から疎外され單なる周邊の相互的活

動として空間的社會の契機と考へられるものであつた。ところがかかる空間的相互性の關聯は未開社會の生命的機能の内に見出される社會的關係に他ならない。トロブリアンドの未開種族にあつては、マリノウスキーの報告によれば、過去に關する歴史的時間の遠近法的關係の意識が缺けてゐるといふことは既に見た如くである。彼等の時間意識に於て、過去は直接的な世代の記憶に内在する主觀的な連續性であつた。それは現在の行爲に關する否定的な力として自己に對する基體性ではなく、現在との相互性に於ける連續的な内容として意識に内在する。かかる連續的な過去の限定に於ては行爲の現在も同様に自己に自覺されることなく、従つて單に生命的な力の關係をなすものに過ぎない。然るにかかる連續的な直接性に於ける記憶の内在を越え、他方に於て過去の内容は出來事の平面的な並存に過ぎず、その時間的繼起の關係を自覺することができない。それは空間的な同時存在の平面に排列された出來事の多様であり、自己に對する外面性として存続し、現在の時間的媒介を喪失した空間性の外面的規定に過ぎない。従つて過去の時間的限定にかかる出來事の空間性に於て把へる意識は、それを單なる超越性として自己に對立せしめるものであるが、これは自己との否定的對立の自覺なき直接的な定立として、空虚な存在に過ぎず、従つて自己のはたらきの内に吸収される同一性の内容であると共に、他方に於ては自己自身の對立性の自覺なき關係として、かかる外面性の中に自己を見失ふに到り、その相互的な自己喪失に於ける關係となる。かくしてこの意識に於ける超越性の契機は自己に對する出來事の多様として空間的な斷絶であり、かかる平面的存在の自己自身に於ける直接的な限定は、自己の否定的統一の時間的契機を自らの空間性の内に吸収し、自己との相互的關係そのものに於て圓環的な構造をなすものである。

かくの如く過去の超越性に關して、その遠近法的關係の自覺的連續なき直接的な斷絶性として、それは空間的排列の多樣であつた。かかる自己の行爲的限定に於ける他者の自覺的媒介なき單なる外面性に於ては、自己の活動は自由なる未來企劃に於て自己否定的現實を媒介として行爲の現在に於て統一する關聯ではなく、かかる超越的過去から無關係な活動として自己の内面性に於ける必然性である。超越性の規定が自己に於て否定的な傳統の現實として行爲の現在に於て自己否定的に媒介されることなく、單なる空間的な外面性であるところでは、逆行爲の自己限定に於て自己の自由なる自覺の喪失であり、單に自己の内面性に於ける必然的活動に過ぎないであらう。即ち外面的限定の直接性は、同時にまた自己の活動に關しては、直接的に自己に内在する主觀性の内容とならなければならない。超越の直接性は現實の自己を疎外する外面性であると共に、その現實性は自己自身の活動に於て超越性を自己の内面性に解消する相互性である。過去がその時間性を喪失した單なる空間的外面性であることは、直ちに逆に自己の時間的限定に於て過去の自己否定的超越性の放棄となり、直接に自己自身の意識の内容として内在する内面的必然性の過去である。過去の限定は單なる自己の體驗に於て記憶に保存せられる意識の必然性である。かくして自己の行爲的限定の制約は、自己の自由企劃に於て否定的に對立するものとして媒介せられる關係ではなく、自己の記憶に於ける内容として傳統の外面的強制に過ぎない。従つて未開社會は單なる傳統の規定であり、「他の總ての人の行つたものに對する固執が、トロブリアンドに於ける土人たちの行爲の主要規則である。」「父親——またはトロブリアンド人ならば母方の伯父といふところであらうが——が爲したものは、行爲の規範として、兄弟が行つたものよりも一層重要である。」²⁾ かくの如く行爲が自由なる未來企劃を通し

て限定される自發性を缺くところでは、それは自己否定の契機なき自己自身の必然性の限定に過ぎず、自己に於ける過去の本質の衝動である。従つて未開社會にあつては、行爲の時間的構造は、自己の必然性としての空間的過去の限定であり、時間の否定的中心の本質を疎外した周邊の關聯に過ぎないであらう。

かくの如く未開種族は、その時間的限定に關して過去の直接性であり、かかるものとして單なる空間的關係の構造であつた。そこには主體の自發性を缺くものとして、それに對して否定的に對立する基體的本質の自覺もなく、單なる自己の必然性として空間的相互性に解消され過程である。従つて例へば死の否定的威力の如きも單なる生の交替關係であり、従つてそれが自己自身を否定する絶對的斷絶の自覺を通して、行爲的現實に於て、生と死の矛盾的關係を自己自身の永遠に媒介する過程ではなく、生と死の循環性の意識に過ぎない。かくの如き空間と時間、生と死、現實と超越の關係は凡て直接的な相互性の平面に解消され、自己の否定的中心なき空間性の構造であつた。ところがマリノウスキーに於ける機能的關係は、既に見た如く現實の相互性として空間性の形式をあらはすものであつた。してみれば神話の機能的把握はかかる未開社會の空間的關係として、現實の周邊的構造に關するものであらう。即ち神話の世界がマリノウスキーの示す如く相互性の機能に於て「社會」の中に生きてゐるものであるとすれば、それは未開社會そのものの生命的な構造に他ならない。そこに於ては神話は現實であり、現實は神話的であるといふ相互的循環であり、自己と他者とが相互的否定の分裂を通して、自覺的に媒介される歴史的構造をあらはにするのではなく、直接的に相互に交替する關係に過ぎない。従つてそれは現在の行爲的限定により、現實の空間的相互性が時間の統一に否定的に媒介される歴史的自己の中心を自覺することなき圓環的

運動の過程であり、従つて歴史的中心の構造から疎外された關係に過ぎないであらう。それは自己が他であり、他が自己であるといふ關係であるが、その轉換に於て自己が自己自身の否定によつて自己であり、他は自己の中心に媒介されることによつてはたらく現實であるといふ如き媒介統一ではなく、従つてそれは自己自身の中心に於て自己の運動を統一する構造を自覺することはできない。現實の機能的關係はかかる自己の中心なき周邊の圓環的關係をあらはにする方式であるが、歴史的現實の媒介された構造を示すものではなく、かかる中心への自覺的關聯なきものとして、自己自身の周邊的空間性を自覺しない。即ち單なる周邊の運動として、それは中心の統一的限定を知らず、従つて自己の運動の周邊性そのものを自覺することができない。勿論かかる周邊の運動が、その本質に於て中心の統一的限定の契機を自己に含んでゐないのではない。直接的な空間的相互性が時間的限定から解放されてゐるといふのではない。未開社會に於ける機能的關聯に於ても既に時間性の意識は過去の傳統的制約の中に直接的な形式に於てではあるけれども存在してゐたものである。けれどもそれはその構造に關して空間化された過去に過ぎず、自己の中心の自覺に媒介されぬものであり、従つて周邊の意識としての機能的立場に於てはあらはにすることはできない。それは自己に於ける相互性の立場であり、自己を空間性に於て把握する關係として、自己自身の周邊の自覺を伴はず、それによつて自己の中心的媒介の本質を知らぬ空間的相互性の關係に過ぎない。

ところがかかる機能的相互性の關係を無媒介の空間的な周邊の關係であるとする意識は、われわれの自覺的な意識として、既に綜合の意識でなければならぬ。それは自己を周邊として意識することによつて、かかる直接

性を中心に媒介する自覚であり、既に單なる機能の圓環の内面に止まることはできない。即ち中心がないことを自覚する意識は、かかる周邊的な關聯を超えたそれ自ら中心的な意識であると同時に、自己自身の活動に於ける中心を自覚するものである。圓環的な活動は、單にその機能的關聯の中に自己をあらはにする自己形成の過程に止まらず、自己の自覺に於てこの運動を否定して、逆にかかる否定的行爲を通して周邊的なものとして媒介される統一である。活動の中に收斂され自己を形成する中心は逆に自己否定によつてその方向を逆轉し、かかる活動を自己の中心から統一し、その放射的統一の構造に於て周邊の活動を自己に媒介する過程でなければならぬ。かくの如き中心の否定的統一によつて、相互性の運動は自己に對して自己自身を周邊的として自覚するのである。然るに自己に對するこの中心の自覺は、同時に自己自身に於ける自覺を媒介するものでなければならぬ。周邊の限定は單に自己に對する中心からの自覺に一方的に吸收されることはできない。自己に對する自覺は自己否定的な限定として、同時に自己自身に於ける中心の自覺である。周邊の相互性は空間的なものとして時間の中に媒介されることによつて全體的關聯の自己に於ける構造を自覚するものであつたが、かかる空間的周邊的時間的中心への媒介は、同時に空間的相互性の自己自身に於ける時間的統一の自覺を媒介する。かくして機能の社會的空間性の相互的關聯は、歴史的現實の構造的關聯に於ける契機として自覺されるのである。従つてかかる周邊的相互性の中心が自覺される過程は、單に自己自身の運動の内部で中心が形成されるといふ直接的な過程ではなく、却つて自己の相互性を否定して自己に對する否定的統一としての歴史的中心に自らを媒介することによつて、その綜合的構造の周邊的契機として自覺する自己の行爲的限定によるものでなければならぬ。即ちそれは

却つて自己自身を中心なき空間性として否定することにより、その圓環的運動の根柢を貫いて自己に對する歴史的現實の本質に媒介され、かかる時間的中心の自覺を通して自己自身の内部に於て周邊的活動の中心をあらはにするのである。かくの如く社會の生命的活動としての機能は、歴史的世界の構造に於て、未開的、周邊的關係であるといふ自覺を通して、かかる未開的現實の自己否定的な運動の内に自己自身の周邊に於ける時間的關聯の自覺が媒介されるのでなければならない。

してみればかかる自覺の過程は二重的な構造をあらはすものであらう。マリノウスキーに於ける神話の機能的關聯は、既に見た如くわれわれにとつては未開種族の直接性に於ける社會的構造として理解されるものであつた。それは社會のそれ自體に於ける圓環的な活動であり、自己に於ける歴史性の自覺を含まぬ直接的な空間的相互性であつたが、かかる未開社會の非歴史的本質の自覺は、單に未開種族の社會的機能の内面に於てはあらはにすることができない。かかる自覺そのものは、非歴史的存在に止まらず、それを超えた歴史的な自己の自覺でなければならぬ。即ち未開社會の空間性の關聯が、非自己的として自己に對して否定され、かかる否定の自覺的なはたらきに於て逆に自己の本來的な歴史的中心から規定されて自己自身を周邊的な關聯として自覺する過程であつた。従つて機能性はその空間性に關して單なる自然的なものでもなく、またその機能の關聯に於て文化的構造の一般的形式をあらはすものでもない。それは相互性の直接的關聯として未開種族の生命的文化の形式であり、歴史的文化の一般的構造に對して、その時間性の契機を疎外した形態である。従つてかかる自己に於ける直接性を否定し、歴史的世界の中心に否定的に媒介されることによつて、世界の歴史的構造に於ける周邊として空

間的な基底を構成するものである。かくの如く未開性の自覚は自己に對して歴史的中心の媒介によつて、未開性が未開性として自覚される過程であつたが、それと同時に他方に於ては、かかる周邊性の自覚は、自己自身の機能的關聯そのものの内部に於ける中心の自覚を媒介するものである。未開社會が歴史的世界の中心に對して空間的周邊であることは、同時に自己自身の未開的構造の内に於ける歴史性の自覚を媒介し、かかる空間的關聯に於ける時間的統一を自覚することである。未開種族はその社會的機能に關して、時間性の構造を自覺せぬ空間的相互性であるが、自己自身の内部に於て既に即自的には世代的交替に於て主觀的記憶として時間性の本質を内在するものであることは、われわれの既に見たところである。しかしそれは機能の直接性にあつては、單に連續的な循環の意識に過ぎず、自己の時間的中心に媒介することができない。従つてそれは未開性の立場に於ては單なる過去の空間的運動として機能の相互性の内に解消される過程であつた。然るにそれが自己の本來的構造を時間に於て把捉し、自己自身に於て歴史的構造を自覺するのは、單に自己の機能性の運動の内部に止まることなく、逆にそれを空間的なものとして自己を超えた歴史的現實の媒介により、自ら活動を始める未來企劃を通じて行爲的自己に於ける過去の契機として自覺する過程でなければならぬ。即ち自己否定的な未來企劃の行爲的中心は、機能的活動の内に連續的に形成される過程に止まらず、この活動を貫いて自ら歴史的な世界へ自己を媒介する歴史の現實の自覺的行爲である。未開種族に於ける自己自身の歴史性の形成は、却つて世界の歴史的中心の自覺を通して可能となるのであり、單に機能的相互性の自己に於て自覺されるものではない。かくの如く自己の中心の自覺は自己に對する世界の中心に媒介されることであると共に、かかる歴史的世界の中心は周邊の機能的關係

に於て媒介されるのであり、かくして世界そのものの自覺が全體的にあらはにされることが出来る。従つてかかる歴史的中心と周邊との相互媒介を通じて、未開社會の機能的關係は、歴史的世界の周邊的構造として歴史的现实の全體性に於て自覺されると共に、逆にかかる歴史的自覺によつて未開社會の空間的機能が時間的中心に媒介することができるのである。未開種族の周邊的機能は歴史的中心から頽落したものととして、自己の時間的本質を空間的關聯の内に埋没し、自己自身の中心を解消、忘却したものであるが、それが周邊的として自覺されることは、單に自己自身に於ける活動の全體性に止まらず中心と媒介され、かかる歴史的中心からの制約の下に立つと同時に、その基底として中心の活動を支へるものである。かかる歴史的中心の自覺に媒介されることによつて、他方に於ては未開種族の機能的關聯が自己自身の歴史の構造を構成するといふ自覺の二重的な過程である。

(1) Malinowski, B.: *Argonauts of the Western Pacific*, p. 303.

(2) *ibid.*, p. 327.

六

以上によつてわれわれはマリノウスキの神話解釋を概観し、その社會的機能關聯を未開種族の構造として歴史的現實の周邊性に於て理解した。マリノウスキはトロブリアンド諸島の神話をその探求の地盤として、神話的現實を社會的關聯に於ける相互性として把握し、神話的社會のかかる特殊性を超えて機能的關聯を、無媒介に文化形態一般の形式として形成した。しかしながらわれわれにとつては、かかる機能的相互性は特に神話的な未

開種族に於てはたらく生命的活動の直接的關係であり、歴史性を疎外した周邊的社會の空間的構造に於てその固有地盤をもつものであつた。神話を生きてゐる社會に於てあらはにされる相互性の關聯は、實は生命的社會のそれ自體に於ける直接的構造であつたのである。従つてわれわれの歴史的自覺の立場にとつては、それはその直接性に關して否定され歴史的中心との媒介に於て周邊的として反省されるのでなければならぬ。然るにかかる機能的關聯を未開種族の内に展開した機能主義の立場に於ては、この未開種族に對する構造は自覺されない。機能主義は未開種族の内部に於て自己自身の構造としての相互性をあらはにする方法ではあるが、それが生命的な未開種族の生きた構造として歴史の周邊の關聯であることを、自己に對して自覺することはできない。そこにマリノウスキーの機能主義の立場が人類學の方法として内在するところの問題があるのであらう。

先づ第一に機能的研究は既に見た如く未開種族に於ける特殊的文化形態の機能的構造に關するものである。マリノウスキーにあつては人類學の探求は、未開種族の文化的特色を孤立して、個別的な數量的多數に於ける外面的な比較抽象によつて恣意的に構成される過程ではなく、それが特殊な現實の文化的全體性に於て脈絡をもつた機能として理解することであつた。即ちそれは或る制度・風習等をその活動する社會的状況の内に於ける部分としてその相互的關聯に従つて把握する。従つて機能的把握とは、社會的現實の部分をそれ自體に於て孤立化する抽象ではなく、自己を超えて他のものとの關聯に於て自覺する全體性の理解である。然るにかかる相互性の關聯は全體脈絡として特殊の現實の文化的關聯である。かくして文化的特殊の機能は特殊な現實の内にはたらく關係として、自己の孤立的個別性を否定して、特殊の社會の全體性に於ける自己自身の構造をあらはにする

ものである。マリノウスキの機能主義的な探求は、トロブリアンドの特定未開社會の内部に於ける實地討査によつて檢證されるものであつたが、かかる特殊な社會的關聯の實證性として、その内に自己を没することによつてあらはにされる機能の觀察であつた。かかる實證的な觀察により特殊性に於ける自己の全體性に於ける關聯としてあらはにされる相互性は、かかる特殊性の科學的解明に他ならない。かくの如く社會的な實證性に於ける機能は、特殊な未開社會の全體性の内面に於ける機能であり、それを地盤とするものとしてマリノウスキの機能主義は未開種族の實地討査に於て實證的な觀察記述に成功し、科學的な價値を擔ふものであることは、認められなければならない。未開種族に於ける「實地討査」の方法としてそれが人類學の領域に於て廣く承認される所以である。

しかしながら第二にそれはかかる特殊性の關係そのもの直接的な一般性として、文化形態の社會的空間化の理論である。機能的理解によつて現實にあらはにされる相互性は、特殊の關聯に於て形成される自己の構造であつたが、それはかかる自己の特殊性そのものを自覺することなき觀察の直接性であつた。特殊性の自覺は、われわれにとつて歴史的社會の周邊的構造としてその機能の關聯を自覺する過程であることは既に見たところであるが、機能主義の立場は、かかる自覺の媒介なき直接性として、自己自身の特殊性を無媒介に普遍化し、それを文化形態一般の形式として把握する科學的要求である。機能主義はその科學性の當然の要求として單に特殊な文化の風習制度の觀察や特異なる儀禮・慣習の機能の敘述に止まることはできない。それは未開種族の内に文化の機能の關聯を實證的に敘述することに満足せず、一般に社會的機能の理論として普遍的構造の科學性を要求する

ものである。そこに所謂「機能主義」の理論の問題が内在する。それは質證的な實地調査の方法として特殊の現實の内面性に關はり、文化的諸形態をその全體的な社會的關聯の内に把握するものであつたが、その一般性に關して、かかる特殊性に於てはたらく自己の自己否定的行爲の媒介により、本來的な自己の歴史的中心に於て自覺することなく、相互的關係そのものの形式を一般化する直接的な過程である。それは個別に關はる主觀性の自己を特殊の現實の相互性の内に否定する科學性の要求であるが、かかる特殊性への否定の活動が單なる相互性の運動の内に自己を埋没し、從つて逆に自己自身の否定的自覺に於て媒介されることなき直接性であつた。從つてその普遍性は現實に於ける文化の機能的關聯をその形式的關係に從つて一般化するところの現象の直接的本質の形態に過ぎない。即ち特殊な未開社會に於ける自己としての機能は、かかる社會に於て自己を否定し、その行爲的限定を通じて自己の歴史的中心を自覺するのではなく、自己の周邊的關聯をそのままに任意の中心として、空間的な平面的構造に於て一般化し、自己の歴史的關係を否定するに到るのである。

かくの如くわれわれにとつては特に未開社會に於ける相互性としての機能が、マリノウスキーに於て社會一般の構造として把握され、その周邊的關聯が直接に自己自身の中心を形成するものであつた。元來マリノウスキーの機能的探求は、未開種族の實地調査に關する格率として質證性の態度であつた。それは文化の特殊性に於ける個別性を抽象し、その外面性に從つて一般的な歴史的圖式に構成する主觀性に對して、かかる主觀的恣意を現實の中に否定し、その社會的關聯の全體性そのものに於ける機能的相互性をあらはにせんとするものである。然るにかかる相互性の關係は、社會的現實に於ける主觀的な歴史構成に對する否定に止まらず、社會の基本的原理として

現實の社會的構造そのものに於ける歴史的關聯の無視と蔑視へ導かれる。そこに現實科學としての民族學の領域に於て、機能主義に對する批判が集中されるのである。マリノウスキの機能探求が未開種族の研究に於て占める重要な意味が一般に承認されながら、それと同時にその機能主義の理論が主義としての誇張を擔ふことが屢々指摘される所以である。¹⁾それは自己の特殊的地盤に無媒介に内在し、自己の自覺的活動によつて否定的に媒介されることなく、従つてそれが他に對する關係を反省しない文化の閉鎖的全體性の立場であり、かかる自己の特殊性によつて文化的特色の「傳播」に對して反對する。それと同時にかかる特殊的全體性としての直接性は、自身の相互性に於て反歴史的な機能社會性である。この反傳播的、反歴史的な特殊の個別性の立場が、例へばロヅキーなどの強く指摘することは周知のところであらう。ロヅキーは文化の閉鎖的全體性を方法論的便宜に過ぎないとして、マリノウスキのドグマに反對する。文化科學は單一文化の集中的全體の研究に限ることはできない、「それは疑ひもなく重要ではあるが、しかしそれが民族學者の仕事の全體を構成するものではなく、またその優越的な部分を構成するのではない。」²⁾彼にあつては社會的傳統の凡ゆる項目を記録することは、その實在の他の様相と關聯されることでなければならず、「それが同一の文化の内にあるか、或ひはその外部に存するか」³⁾の媒介的な關聯であり、民族學に對する自然的統體は「凡ゆる時期と凡ゆる場所に於ける凡ゆる人間の文化」⁴⁾の構築であり、かかるものとして文化の地域的「分布」の探求が要求される。かかる文化の傳播性と同時に、ロヅキーにあつては文化形態の内部に於ける非合理的なる「遺制」の存在が認められる。マリノウスキは文化構造に關して、一切を機能の必然的關聯に解消し、その偶然的な複合を否定し、歴史的構成に反對したのであるが、事

實に於ては彼自身進化の遅れたもの、歴史的成層性の指示に注目しなければならぬとして自らそれを裏切つてゐることが指摘される。かくしてマリノウスキーの機能主義は民族學の古い傳統的な問題としての歴史的遺制の問題を廻つて、實證的領域に於ても批判せられる反歴史的な立場であり、相互的必然性の社會的關聯に他ならない。

かくの如くわれわれがマリノウスキーの機能的相互性をその本質に關してあらはにした過程は、同時に實證的民
族學に於ける批判によつて展開さるものであつた。しかしながらこの機能主義の問題は、單に特殊な部分に於ける實證的な批判に止まらず、その根柢に於ける統一に媒介することではなければならない。従つて最後に第三にそれは機能的な「人類學」の綜合が、歴史的主体的な「人間學」によつて媒介される過程である。既に見た如く機能の圓環的活動は、人間的要求の有機的關聯に於て必然化される運動であり、人間性一般の基底に於て文化的諸要素の關係が普遍的必然的な形式に於ける一般的なものであつた。マリノウスキーにあつては、文化は表現的現實として人間的要求の相互性に還元され、一切の歴史的現實はかかる相互性によつて必然的機能化されるものであつた。かくの如く機能主義の社會的關聯は、その歴史的媒介の機能化として社會的相互性であつたが、かかる社會的必然性の關聯は人間性一般の相互性によつてその普遍性を保證するものである。即ち未開種族の生命的機能の周邊的關聯はかかる人間性の普遍的根據を通して、文化的構造一般の社會化的理論に形成されるのである。⁵⁾

然るに人間性の理念がその普遍性に關して歴史的媒介を缺く直接性であることは既に明かなことであらう。未開種族の現實に深く沈潜する精神が廣い人間的な共感を以つて自らを埋没する態度であることは、同様に自明のことであり、トロブリアンド諸島に於けるマリノウスキーの態度が、その原住民に對する深い愛情を以つて貫かれ

てゐることは、われわれの容易に認め得るところであり、彼の報告の成功を裏づけるものである。しかしそのことは決して遙かなる異境の民族の内に自己を忘却し、その内にはたらく自己の歴史的行為の關聯を放棄することの意味せず、或ひはかかる特殊の現實をその歴史的關聯から孤立して直接に人間社會の一般的構造に形式化することであつてはならない。然るにマリノウスキーにあつてはかかる主體的な人間の共感が人間性の外面的形式と直接に結びつくものであつた。かくしてそれは未開種族の現實がそこにはたらくわれわれの自己の媒介によつて特殊の周邊的社會の機能的關聯であることの自覺の缺如であり、従つて自己に對する歴史的現實の中心に對する無自覺的直接性であると同時に、その一般性に關して、かかる自己の行為の中心の媒介なき人間性の外面的普遍性に基くところの周邊的社會の一般化であり、未開種族の空間的關聯を自己自身に於ける人間性一般の關係として社會的機能の直接的な非歴史的構造を形成するものである。従つて機能主義の理論は人間性の相互性として歴史的媒介の自覺なき直接的空間性の原理であるが、かかる自覺はわれわれの行為的自己に於て歴史的中心に媒介する統一の過程でなければならぬ。即ちそれは一方に於ては機能的關聯の相互性をわれわれに對して未開性の周邊的關係として自覺し、歴史的世界の中心に媒介すると同時に、かかる自覺を通して逆に周邊的構造の内部に於て、その空間的關聯に於ける時間的自己の統一を構成する過程である。

しかしながらかかる歴史的構造の自覺は、未開種族の單なる内面性と人間性の外面性との直接的な關聯に止まらず、その行為に於て歴史的現實に生きる自己の自己否定的な媒介の問題である。それは單に社會學的「人類學」の對象性に於てではなく、同時に哲學的「人間學」の根柢に媒介された歴史的社會の現實性に關する全體の構造を含むものである。未開種族の現實性は歴史的な中心に於てはたらくわれわれの歴史的活動の主體性と自覺的に媒介されなければならない。かかる自覺を通して未開種族の現實は歴史的世界に於ける特殊性として統一的

に自己の構造的地位をあらはにすると共に、かかる周邊に於ける自己自身の活動のそれ自身に於ける歴史的關聯をも自覺することができるのである。しかしながら勿論、人類學の立場が現實の未開種族の内部に自己を没し、その内面に於ける實證性を根柢とするものである限り、われわれの文化的な意識を以て直接に作爲する外面性であることはできない。それはかかる自己の主觀的外面性を否定して特殊的現實の内に自己を没する現實の内面的了解であり、主體的な人間の共感に支へられるものである。然るにかかる現實の内面性は直接的な客觀への埋没ではなく、自己否定の主體的活動によつて媒介された過程であり、従つてまた人間性の主體的了解は客觀的現實の特殊性に於ける自己否定の自覺でなければならない。してみればわれわれにとつて實證性に關する未開種族の内面的了解は同時に歴史的現實に於て、自らはたらく自己の否定的な自覺によつて媒介されるのでなければならない。かくして人類學的探求に於ける特殊的現實の實證性は、歴史的世界の否定的中心に對する人間學的自覺に媒介され、従つて特殊的現實の機能は自己自身の否定を通して歴史的中心の周邊的契機として、その構造統一に綜合され、未開社會の歴史的世界に於ける關聯を自覺すると共に、他方に於て機能的相互性の空間的關係の内に自己の時間的統一をあらはにし、未開種族の内面に於ける歴史的構造を自己自身に形成することができるのであらう。

- (1) Cf. Gold.nweis.r, Alexander: *Leading Contributions of Anthropology to Social Theory*, (in *Contemporary Social Theory*, ed. by H. E. Barnes, etc. Pt. VI. 1940) p. 474.
- (2) Lowie, Robert H.: *The History of Ethnological Theory*, (1937), p. 235.
- (3) *ibid.* p. 235.
- (4) *ibid.* p. 236.
- (5) Cf. Malinowski, B.: *The Group and the Individual in Functional Analysis* (*The American Journal of Sociology*, vol. 44, 1938-39), pp. 939 sq.; *ditto*: *Culture*, p. 625.

(完)